

血様下痢を呈する牛ウイルス性下痢・粘膜病が発生した 酪農場における清浄化対策

淡路基幹家畜診療所

○小西健治 藤本修司 石川貴將 久野尚之 宮本孝明

西崎 悟 大平正信 曾賀久征 野口 等

管内の 1 酪農場で血様下痢を呈する疾病が育成牛舎の同一牛房で発生した。病性鑑定の結果、牛ウイルス性下痢・粘膜病（以下 BVD-MD）の持続感染牛（以下 PI 牛）であると診断し、清浄化対策を行った。

材料および方法

- 1) 発生農場：ホルスタイン種成乳牛 46 頭、育成牛 28 頭を飼養する管内酪農場
- 2) 発生の概要：症例 1（2012 年 8 月 22 日生の初妊牛）は 2014 年 5 月 7 日に血様下痢にて求診，第 3 病日に死亡。症例 2（2013 年 7 月 1 日生）は 2014 年 5 月 26 日血様下痢で求診，第 5 病日に死亡したため病性鑑定を実施。症例 3（2013 年 7 月 27 日生）は 2014 年 6 月 17 日血様下痢で求診，第 4 病日に鑑定殺を実施。発症は全て同一牛房であった。
- 3) 調査項目：①症例 2，3 を剖検，BVD-MD ウイルス検査（PCR 法）症例 3 は病理組織学検査，BVD-MD ウイルス分離，抗体価測定②2014 年 7 月に全頭（71 頭）BVD-MD1 及び 2 型中和抗体検査し抗体陰性牛については PCR 法および ELISA 法で BVD-MD ウイルス検査③PI 牛淘汰後出生した子牛（7 頭）を ELISA 法で追跡調査④PI 牛と同時期（2012 年 6 月～2013 年 3 月）に胎児であった牛と PI 牛発生の前年の同時期に同農場で出生した牛との生後 1 年以内の死亡率を χ^2 検定により比較。

結果

①症例 2 は腸粘膜に点状出血と鞭虫の多数寄生が認められた。症例 3 では回腸の陰窩ヘルニア，動脈壁壊死が認められ BVD-MD ウイルス検査では PCR 陽性，ウイルス分離陽性，抗体価 2 倍未満のため PI 牛と診断した。症例 2 も再検査の結果 PCR 陽性であったため BVD-MD 発症牛と診断した。②育成牛（16 ヶ月齢）1 頭を PI 牛と診断し淘汰した。抗体価 2 倍未満であった 3 頭（3 ヶ月齢以下）の牛には牛 5 種混合生ワクチン（京都微研）を接種した。③追跡調査では全頭陰性であった。④PI 牛と同時期に胎児であった牛の死亡率は 28.9%（13/45 頭）で前年の 5.6%（2/36 頭）と比べ有意に高かった（ $p < 0.01$ ）。

まとめ

育成牛舎の同一牛房で血様下痢を呈する疾病が短期間で続発し，病性鑑定で BVD-MD の PI 牛と診断した。PI 牛発生時では死産事故が前年より増加していた。PI 牛はウイルスを持続的に排泄し，同居牛に種々の疾病を喚起することから，早期に摘発・淘汰する必要性を再認識した。今回 BVD-MD の診断とともに，全頭検査を実施し PI 牛を摘発・淘汰することにより清浄化し，今後 PI 牛が牛群内に存在することによって起こる経済損失を未然に防止できたと考える。